

SDGsがわかる

つた 伝える! 国連の仕事

一人ひとりの行動にこそ希望がある



東京大学グローバル教育センター主催「Dialogue at UTokyo GlobE」の参加者たちと。フレミング事務次長は学生に対し、若者が気候変動に取り組む大切さを知った。5月29日、東京都文京区

「気候変動メディアシンポジウム」で話すメリッサ・フレミング事務次長(左から2人目)。気候変動について、メディアが科学にもとづいて正しい情報を発信し、解決策も提示するべきだと話していました

対話には常に最新の動きを交えて

おおぜいの国連の幹部が、加盟国である日本の関係者と直接話すために訪日します。関係がより深まるように、日程を考慮し、根本があるさん率いる国連広報センターの重要な仕事の一つです。メリッサ・フレミング国連事務次長がやってきたとき、同行した根本さんは彼女の信念を目的の当りにしたそうです。どんな思いだったのでしょうか？



5月末、私の上司にあたるグローバル・コミュニケーション担当のフレミング国連事務次長が訪日しました。フレミング事務次長はコミュニケーションのプロです。その「伝える力」で、日本の関係者にインパクトを残してほしいという期待があり、日程を考慮するうえで力が入りました。フレミング事務次長の東京での日程にずっと同行できたことは、とても有意義な経験でした。「国連を伝える」という使命を持った代表者が、この仕事にどのように日々向き合っているかを知る、貴重な機会だったからです。

気候変動とにせの情報の拡散

「気候変動」とは、気温や気象状況が長い年月をかけて変化していくことをいいます。1800年代以降は、石炭、石油、天然ガスなどの化石燃料を燃やすという、おもに人間の活動によって引き起こされています。ところが最近、SNSなどで、「気候変動は現実のものではない」というにせの情報(フェイクニュース)を発信する人たちが増えています。国連では、気候変動に関する「事実」とその「根拠」をウェブサイト上で公開しています。その情報が正しいかどうかを確かめる習慣をつけましょう。

変革へのうねり作るための信念

実は今回、私がよくはって、フレミング事務次長に東京で4回も講演してもらいました。対象はメディア関係者、学生、シニア層、そして国際的な知見を持った方々と、毎回参加者の特徴が大きく異なりました。参加者の傾向や関心をとらえ、講演の内容がそれぞれの方々にひびくものでなければなりません。事務次長は、毎回話すトーンや紹介する具体例に変化をつけるなどの工夫をしています。講演の中で、フレミング事務次長が何度も口にした言葉は「希望」です。特に印象に残ったのは、「希望は恐怖よりも多くのアクションを起すことができる」という行動科学にもとづくメッセージです。紛争、分断、気候変動、にせの情報やまがった情報の拡散、といったいくつもの困難は、一人ひとりにとっては、とても大きな課題に感じられます。しかし、世界はこれらを解決する手段を持っているという、希望があります。一人ひとりの行動にこそ希望があり、その行動を大きなうねりにすることができるのです。

この重要なメッセージを分かりやすく伝えるために、会議の合間をぬって、スピーチ原稿やスライド資料を自ら何度もギリギリまで修正する姿に、フレミング事務次長の「国連を伝える」ことへの執念にも近い信念を感じました。この「伝える」ことへのこだわり大切さは、国連の仕事に限ったことではありません。読者のみなさんが、将来どのような分野に進んだとしても、伝えることは仲間を増やし、大きな変革へのうねりを作るために必要なことです。ぜひみなさんには、学校での活動の中でも、伝えることに積極的に関わって、その技術をみがいていただきたいと思っています。



ねもとかおる 兵庫県出身。東京大学法学部卒、アメリカ・コロンビア大学大学院修了。テレビ朝日のアナウンサー・記者などを経て、1996年から2011年末まで国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) で勤務。国連世界食糧計画 (WFP) 広報官、国連UNHCR協会事務局長としても働いた。フリージャーナリストの活動を経て、13年8月から現職。

(掲載：朝日小学生新聞 2025年7月10日掲載)